エミリー・ブロンテの研究

——エミリーの地を訪ねて——

宮川下枝

これは学術論文である以上，エミリーの思想環境に関係あることだけを纒めることにしよう。長い間の念願であった『嵐ケ丘』の地をこの度は一人勇気を出して訪れて来たのであるから書き出せば数限りない思い出が浮んで来るのであるが。

汽車が田舎まちの Keighley に着いたのは八月二日もう夕方の6時半だった。私はその日ロンドンから一人汽車に乗り Leeds で乗り換え緊張に緊張を重ねてやっと Keighley という駅に降り立ったのであるから感慨無量といいたい処であるが，まだまだ感慨無量にはなっていられない。八月というのに何と寒々とした夕方の空模様であろう。駅前はオーバーに身を包んだ母と娘が通り過ぎたゞけで，書物で常に読んでいた荒凉とした感じは既にこゝにも充分漂っていた。

Keighley 迄汽車が通じたというのは Brontës 姉妹の伝記にも出ていた[1]。タクシーを頼まねばならぬので駅の端っこの小さな待合室に行って，"Haworth please." と頼むが，その受付けの少女の英語の発音の，何ときゝとりにくいこと。だがこの辺は Midland English で一番きゝとり難い処だときいていたので驚きもしなかった。随分待ってやっとタクシーが来てくれる。"Haworth. Black Bull Hotel, please" と云えばすぐ分ってくれる。夕暮がかった田舎道を車はどんどん走る。小さなまち中を抜けて車が坂道にさしかゝった時驚いた驚いた。両側に石づくりの建物の立ち並んだ様は確かにエミリー伝の中に読んだ通りの道だが今，車の登っている坂道の急なこと急なこと。私は始めてその時 strikingly steep narrow cobbled road [2]とあったのを思い出した。 steep, steep, 急な坂道とは頭にあったのであ

るが，その大事なたった一つの形容詞 strikingly だけは読みおとしていた。馬車の為につくられたごっついゴロゴロの石の道をタクシーは音をたて，一瞬の間に駈け登ってしまう。夕方なので人影も少い静かな道だ。登り切った時運転手は 'here" と云って止った。私はもう一度眼を瞠はらざるを得なかった。Black Bull とは，エミリーの兄 Branwell が入り浸りこゝで酒を飲み体をこわしてしまった所である[3] と読んでいるところだ。だが今はホテルとなっていることを知って宿泊を予約していた所であるが又何とその建物の小さいこと。ロンドン等の大きなホテルへ泊って来た翌日のことであるだけに「え？これがホテル？」と声に出てしまった。運転手は澄ましたもの，"Yes, 'otel." と答えて料金を待っている。

小説にもある通りこのあたりの人は "h" を発音しないのか。小説では知っていても実際にきくと妙な工合である。料金を払ってそのホテルなる小さな昔乍らの居酒屋の建物の前に立つ。あゝ私は Haworth へ着いたのだ。何年来の夢だったのだろうか，泌々と実感が喜びとなって湧いて来る。百年間のも間昔のまゝにこの石の建物を残しておいてくれるイギリスとは何とありがたい国であろうか。改めてあたりを見廻わす。伝記の挿絵に出ている通りの様である。Black Bull Hotel. [Bed & Breakfast] なる看板をもう一度見乍ら中に入る。重い19世紀のドアを押して中に入れば，中はすっかり改造されて明るい壁紙が貼られ近代的なバアーがつくってあるが，昔のまゝの建物のこととて天井は低く二階への階段は如何にもせまい。その手前にブランウエルが入り浸ったというロビーが見える。炉の火が燃えている。八月と云へども英国北部特に今年の異常気候では火の恋しい時候であった。ブランウエルはこゝではそのさわやかな弁舌の故に人気ある存在であったという[4]。惜しいことに彼は，甘やかされて育ったせいか，又家庭教師として入った家の夫人が悪かったせいか，すっかりぐれて帰って来てその素晴らしい才能を伸ばす術もなく，こゝで酒に浸り果ては阿片に身をくさらせてしまったと読んで知っているだけに，暫しそこに立ちすくんでいた。暖炉の上にはブランウエルの絵が額に入れてある。

さて狭い段を上って自分の予定された部屋に通される。中はすっかり近

代的真白いベッドカバーをかけた大きいベッドがあって明るい部屋だが，レースをかけたジョージアン風の出窓の外はもうそこは墓石の立ち並ぶ教会墓地ではないか。「おやッ！こゝに grave yard が！」何と私の部屋からはエミリーが日夜眺めた教会墓地が見えるのだ。何とおあつらえ向きの部屋であることか。—I see around me piteous tumbstones grey.—なるエミリーの詩の一行がやっと現実となって身に泌みる。物は実際に見た時始めてその実感が伝わるものだ。すると私の右手に見えるのは教会堂なのか，そして真向いのずーと向うに見えるのがエミリーたちの住んでいた牧師館なのか。荷物を置くと私は外にとび出してみた。もう八時近いというのに英国北部の夕暮れは遅く，あたりは明るくて何処迄も歩いてみたいような衝動にかられる。こゝは文学巡礼の Shakespeare の地 Stratford on Avon の次に多い地だときく。夕暮で旅行者も今はいない。だが熱心な人々が二，三，まだ墓地を眺め教会堂を仰いでいるようだ。

墓地の中の道の両側に鉄棚がしてあって舗道になっている。勿論エミリーの時代にはなかったものだろう。その道を通って少し外に出てみる。何処に続く道であるか私にはまだ分らない。余り遅く迄一人行っても帰へりが危ぶまれる。遠く遙々来た地だけに何時迄も見ていたいが，今日は宿へ帰へることにしよう。あゝあれが牧師館なのか，これが教会堂なのか。誰に説明して貰わなくとも挿絵で写真で親しんで来た場所だけに一見了解出来る。私はそれ迄読んだだけではどうして理解出来なかった牧師館と教会堂がやっとその位置の占め方が理解出来たのである。牧師館，教会堂そして Black Bull（居酒屋）はコの字型に並んで教会墓地をかこんでいるのである。居酒屋と教会堂が並んで立っているなんて想像もつかないことであった。Gaskell 夫人の「シャーロット伝」にこの牧師館の様子は丁寧に紹介されているが，それでも私にははっきりのみこめてはいなかったのである。私は改めて hotel の玄関前に立ってみると確かに並んで立っているのが教会なのである。エミリーの父が説教し長年牧師としての役を果し，シャーロット，エミリーが幼児洗礼を受け又彼等の眠る教会堂なのであるが，ウエスレーもこの教会に説教に来たそうでこゝはキリスト教の熱心に伝播

された処であり，若い青年牧師はここで年を重ね八十二才の年を終る迄一生を過したわけである。

暗くなる，さあ帰ろう，明日がある。私は食堂へ直行して Fried Fish を注文した。たらのフライであったが，大きな魚のフライの熱くておいしかったこと。お皿一杯に盛りつけたジャガいもと芽キャベツ，たっぷりその田舎料理を味って自分の部屋に退却することにした。二階の階段の真中に大きな犬が横たわっている。"Excuse me" と云って通ればおとなしく通してはくれるが気味の悪いこと。エミリーが飼っていたという Keeper という犬もこのように大きい犬だったのであろうか。部屋はなかなか comfortable で申し分ないのだが，バス，トイレは外の人達と共同だから上手に入浴しておかねばならぬ。又外の部屋の人々の入浴中はこちらはトイレにも行けぬ。ジョージアン風のレースがこゝにも優雅にかゝっていた。新幹線，東京，成田，ロンドンへの疲れが一度に出てその夜私はぐっすり眠ってしまっていた。

翌朝雨だ。朝食をすますと先づ牧師館の方へと傘をさして出てみる。これ又石の坂道を曲ると牧師館だ，今は Museum となって開放されているとは読んでいたが開館は11時とある。

仕方ない。雨の中を『嵐ケ丘』の方へとの道を歩いてみる。スコットランド風の石垣の境をした荒地が果てしなく拡っている。遙か向うに見渡すことが出来るあの一本ポツンと木の立っているあたりが「嵐ケ丘」の地であろう。近道を出来ないかしらと思へば，Private Keep out と板に画きつけてある。観光客が入りこんで困るのだろう。雨は降りしきって来たし荒涼とした感じだけはよく味えるのを感謝して今遠廻りで出かけるのは無理なので一旦宿に戻る。一休みして今度はカメラを置いて又出かける。11.00時開館と同時に，もう既に多くの人がつめかけて居る。左右対相の部屋が玄関を入ると両側にある。その前の芝生はきれいに刈り込みがしてある。なかなか堂々とした立派な牧師館である。父パトリックは六人の子供との生活はこれだけの牧師館を与えられゝば大丈夫やってゆけると思いこの辺鄙な Haworth のまちへ荷馬車に荷物を積んでやって来たと云われ[5]ている。玄

関の右側が父パトリックの書斉で，炉の前の机の上に彼の使用した眼鏡が置かれている。父の書斉の本棚というのは，入口からしか眺めることは出来なかったがこの書物を読んでエミリー姉妹が文学への眼を開かれたのかと感慨深いものがある。

They inherited a love of books, their family life encouraged this love.[6]

（彼等は本に対する愛好心は家庭生活の中から受けとめていった）

炉の左側には小さなピアノがある誠に小さなお粗末なものであったが音楽の才のあったエミリーはこゝでピアノを弾いたそうである。この部屋の入口には綱が引っ張ってあって中には入れない。

この部屋の窓から父はよく教会堂の壁へピストルを打ち鳴らしたそうである。そのような避地であるから護身用として必要品ではあ[7]ったろうが朝早くのその音は幼いエミリー達にはどのように響いたことであろう。

その向側，玄関ホールの左側の部屋が有名な drawing room, 壁紙は新しいが中に置いてあるソファはもう貼布もすり切れている。病を押して仕事をし続けたエミリーが，息絶え絶えになって北風の吹き上る階段を降りて来ると「お医者様を呼んで」とかすかに云うと，そのベッドに横たわったと云う。医者を拒み続け手こずらせていた妹のことだけに，姉シャーロットはとぶように医者を呼びに行ったというが，医者の来た時は既にこと切れていたという[8]。

Stronger than a man! 強い精神のエミリーが最後を迎えたベッドだと思うと私は涙を止めることが出来なかった。誰に遠慮することもない，私は何分間そこに立ち往生していたことだろう。すぐ二階に上るようになっている。絨緞も何も敷いてない階段，彼らのつゝましやかな生活が想像出来る。多くの人が踏みへらして形がまがって半月型になっている石段を登れば真中のちょっとした広場を中心に左右両側に二つづつ，突きあたりに一つ合計五つばかりの部屋のドアがあいてある。

The spotless cleanliness, the lack of carpet; the sandstoned hall floor and stairs, the walls not papered, but stained 'in a pretty dove coloured tint' hair-seated chairs and mahogany tables, bookshelves in Mr. Brontë's

study; the clock halfway up the stairs which Mr. Brontë wound up every night on his way to bed, after conducting family prayers and locking the front door.[9)]

（しみ一つない清潔さ，絨たんは敷いてない石の広場，床，回段，壁には壁紙は貼ってなく，美しい鳩色に塗ってあった。馬の毛をつめた椅子，マホガニーのテーブル，ブロンテ氏の書斉の書棚，階段を登る途中の大時計，これを毎夜ブロンテ氏は家庭祈祷会をして玄関の戸を締めたあと寝室に行く時は巻いていた。）

種々様々な遺品家具が丁寧に陣列されているが，シャーロットの夫ニコルスが大切に蔵していたものを持って来たのであろうから，姉シャーロットの品が断然多い。意外に小さい人だったらしく首飾りも服も小さいこと。

Charlotte was 4 foot 9 inches, Emily the tallest at 5 foot 3inches.[10)]

（シャーロットは脊が低く４尺９寸，エミリーは５尺３寸で一番脊丈が高かった。）

又その地味なこと。ロンドンへ着て行ったというレースのついた服も非常に控え目な色であり布地であった。エミリーの用いた文房具，姉シャーロットの裁縫道具など，私はショーケースに額をくつつけるようにして，その説明を一字一字心ゆく迄読んで歩いたのであるが，印象に残っているのは突き当りの部屋である子供部屋だった。姉妹弟誰もが声も立てずに夜を過したというのは一体どんな部屋であろうとよく想像していたものだが両側を壁にはさまれた何と小さな部屋。こんな小さな部屋に六人の子供達が額をすり合わせて過したのかと驚かされる。壁に残した落書きが今でも大事にガラス貼りにして保存してあるが誠に優雅な女性の横顔が描かれていた。高い鼻が印象的で子供のいたずらと考えるには見事過ぎる，この部屋で子供達はあの驚く程小さな彼等の書物をつくって遊んだりしたのだろうか。

小さいとは読んでいても，実際にガラスケースに入れてある彼等の製本した本の小さいこと。どうしてこんな小さい本をつくることが出来たのであろうかと驚くばかりである。掌の中にすっぽり握りしめることが出来る

位に小さいのである。彼らはここで製本し想像の翼を伸ばし乍ら幾年かを過したのである。

その子供部屋の隣は一番立派な部屋であるがここには彼らの母 Maria Branwellが病床に横わって居り病状が悪化してからは子供達は入ることを許されなかったということである。時々父に連れられて母の顔を見に入った子供達にやつれ苦しむ母の顔はそう慰さめを与えるものではなかったのであろう。母の印象は小説としてもエミリーのものには出て来ない。

"Oh! God! my children, my children!" と悲痛な叫びを残して死んで行ったという母[11]が哀れであった。南のあたゝかい Cornwall の地から而も裕富な家の娘であった彼女が父 Patrick との熱烈な恋愛の末，この寒い見知らぬ地に牧師の妻として移り住む迄の経路又次々に生れる子供達遂に自分は病床に臥し「私の子供たち，あ子供達」と思いを残しつ，死んで行ったという話は余りにも惨めである。

このあと母の姉 Elizabeth Branwell が子供達の世話をして20年も彼らと一緒に過したという。この部屋は叔母の部屋となり再び子供達は入ることを許されなかった部屋である。

見事なシャーロットの数々の絵に眼を瞠りつゝ順路の示すまゝに下に降りると台所へと着く，台所と云っても日本の台所とは全々違う感じであるが炉にしつらえた見事なパン焼器はこれは新しく備えたものだろう。そのパン焼器の上の棚に書物を置いて一心に読書し乍らパンを焼いたというエミリーの姿を思い浮べてみた。荒野への執着を断ち切ることの出来なかったエミリーは，二年間のブラッセル留学，短い Low Hill での勉強を除いては生涯殆どこの Haworth に残ったようである。姉シャーロットが家庭教師をし嫌な子供達の世話をしている間。

She did not really like children and was not one to suffer fools gladly;[12]

（彼女は子供を真から好きではなかったしお馬鹿さん達のお相手も辛抱出来なかった）

as for the children 'more riotous, perverse, unmanageable cubs never grew'[13]

（子供達は騒々しいつむじ曲りの手に負えぬ一寸も大人になれぬいたづら小僧たちである）

妹アンもスカーボロの地で同じく家庭教師の仕事をしている間もエミリーだけはこの牧師館に残って家事にいそしんでいたようである。彼女の好きな荒野への道とはどのように台所からつながっているのであろうかと私は一人想像してみたものであったが，北側の奥の部屋であるこの台所のドアをあければ成る程直ちに荒野へ出るようになっている。今は附随した建物が増築されているから，そうはいかぬが，エミリーは常々窓越しに荒野の果てに眼をやっていたのだろう。そしてそこに住む想像の主人公がヒースクリフであったのであろう。

Emily utterly reserved, strong in her own private intention.[14)]

（エミリーは完全に控え目で自分の中に強く閉じこもっていた。）

何時迄見ても見飽きることはないのであるが，一先ず宿え帰えることにしよう。

でっぷり肥ったこの田舎宿のおかみは実においしい料理の腕前だ，満足！　主人は堂々としたハンサムな中年紳士。ここは今も社交の中心らしく，種々の人々がドリンクを求め食物を注文してカウンターの前に群り，又ロビーに腰かけて食事をしている。奥の食堂でひっそり食べている人は余りない。私も今度はサンドイッチとコーヒーを頼んだ。

午後からは，財布だけ持って，牧師館へ行くのとは反対側の坂道をプラリと下りて，まちの方へと歩を運んでみた。エミリー達は滅多にまちには下りなかった，只荒野の散歩を楽しんだとある。もう午後で観光客はせまい道一杯，これでは昔の気分に浸ることは出来ない。両側の店を眺めつゝ急な坂道を下りるとバス道路が走っていて更にそれを横切れば美しい花公園が造ってある。色とりどりに咲き乱れる見事な公園は斜面を利用して一杯の陽を浴びて素晴しい。更に下へ下へと歩くうちに谷間へと続くようになっている。この谷間こそがエミリーが Thrushcross Grange と想像した処なのであろう。Grange 迄嵐ケ丘から一散に駈け出したヒースクリフとキャサリンの二人の午後の散策は大した距離であるのに今更のように驚

く。この谷間へ子供だけで散歩に出た日のことが記されている。そのうちに一天俄かにかき曇り雷がゴロゴロ鳴り出し稲光り，父 Patrick の心配はこの上なかった[15]と書かれている，シャーロットの *Jane Eyre* にも急に雷の鳴り出す様子は描かれているがこのあたりの夏の気候であろうか。

私は又坂道を登らねばならなかった。あれ程賑やいでいたホテルがすっかり閉ざれて休憩時間に入っている，だらだらと営業する日本と何という違いだろう。ベルを押して入れて貰い静まりかえって人っ子一人いないロビーを抜けて私も部屋に入るとベッドにもぐりこみ，皆と一緒に昼寝を楽しんだ。一人旅の気安さ，ルームメートのことを案ずる必要もなく，相手のスケージュールに合わせる必要もなく好きな時に好きなことが出来る。何時間眠ったことだろう。森閑とした建物の中で私も亦充分に休息をとった。

夕方7時過ぎたかしら？　又もう一度外に出て見た。今度はカメラを持って。私はまだ肝腎な荒野を歩いていない。折角こゝ迄来て「嵐ケ丘」を見なければ。たとえそれは想像の地であるにせよ，そこ迄はどんなことがあっても行かなければならぬ。そしてエミリーの愛した荒野ヒースの咲く moor を私もこの足で歩いて来なければならない。始めは気が付かなかった Public way to Haworth moor の sign が眼につく。この道を通って行こう。始めは教会内の墓地を抜ける道がやがて鉄柵外に出ると，石垣で境をしたスコットランド風の畑地に出て，更に何十分か歩くとやがて広々とした荒野に出る。あゝこゝなのだ。

> "My sister Emily loved the moors...They were far more to her than a mere spectacle; they were what she lived in and by.....she found in the bleak solitude many and dear delights;"[16]

（妹エミリーは荒野を愛しました。それらは彼女にとっては単なる景色以上のものでした。彼女はその中に生きそれによって力づけられて生きていました。彼女は荒凉たる孤独の中に親しみのある歓びを見出していました。）

自然の描写の美しさをあげれば数限りないが，光と陰がキヤサリンの顔

に交錯して美しかったとあるもう一つの箇所だけを引用しておきたいと思う。

We deferred our excursion till the afternoon; a goldon afternoon of August: every breath from the hills so full of life, that it seemed whoever respired it, though dying, might revive. Catherine's face was just like the landscape—shadows and sunshine flitting over it in rapid succession; but the shadows rested longer, and the sunshine more transient; and her poor little heart reproached itself for even that passing forgetfulness of its cares. (Chap.XXVII)

(私共は遠出を午後迄のばしました。八月の黄金色に輝く午後でした。丘の上の総べの息吹の中には生命が溢れて居りましたので誰でも呼吸するものは，たとえ死にかかっている者でも生きかえるようでした。キヤサリンの顔は丁度その光景のようでした。素早く交互に交錯する光と影のようでした。だが彼女の顔には光はほんの束の間で影の方が長く止まりました。可哀そうに彼女は小さな心を痛めつつも，それでも病気のお父さんのことを思う心配を瞬間でも忘れていることに心せめられました。)

生気に満ちた夏の野に対する歓び，又木陰を通る時顔にうつる木の葉のかげその光と影の交錯，細い描写であり激しいこの小説を和げるのはこの美しい自然の描写である[17]。あゝあの描写はこの木陰だと思いつつ私は夕暮の道を急いだ。その木かげを通るとあとは何もない。広々と果てしなく拡る野である。夏でもぬかりそうな只一本の道が通っている。こゝをロックウッドが嵐ケ丘へと向って雪の降りしきる道を歩いたのだろうか。

丘にはヒースの花がまばらに咲いている。こゝ一面に咲き乱れるのはあと二週間してからだそうだ。こゝでは Heather と呼ぶ。土地の人に Heath ときいては分らない。ヘザーというとよく分ってくれる。リントン少年がキヤシイを待ち構えていたのもこのあたりであろうか。小説のいろいろな場面が浮び上ってくる。

私もこゝで写真をうつしたい。一人旅はその点不自由だ。丁度通りがかりに逢ったお嬢さんにお願いして写真をうつして頂く。夏の夜はまだ空も

あかるく朝方の霧のような雨も止み私はエミリーの愛した moor の空気を心一杯胸一杯吸うことが出来たのである。

> "in winter nothing more dreary, in summer nothing more divine"
> (Wuthering Heights Chapt. XXXII)

(冬はこれ程佗びしく，夏はこれ程神聖な所はない。)

こゝで静かにエミリーの思想の基盤となった環境などについて暫く考えてみたい。

今この有名な三人姉妹，荒野に咲く花のように後年名を馳せた女流作家たちと共に脚光を浴びて来たのは父パトリックである。シャロットの伝記をギヤスケル夫人に頼んで書いて貰い娘の文学上の地位を揺がぬものにしたことでも知られているが，妻を亡くし娘たちを一人前にし，而もその娘息子が次々に亡くなって行った悲しみのうちにも断固として Haworth に踏み止まり牧師としての仕事を続け82才の生涯を牧師として終えたことは賞讃の的となっているのである。

彼が娘達の教育を思ってブラッセル迄遙々留学させることをしなかったら彼女達の学問的基礎は付かなかったであろう。この片田舎の地より勇気を以って二人の娘をベルギーに送ったということは実に勇気のいる仕事であったと想像される。彼等はキースレー迄の道を歩いて汽車に乗り因難な旅行をしたらしい[18]。

だがそれより前に既にこの姉妹に文学的基礎を与えたのもこの父パトリックであった。貧しいアイルランドの農家の生れながら頭脳明晰の故にケムブリッヂの給費生となって学ぶ特権を得て彼の獲得した職は勿論伝道の道に於いてゞあるが，牧師補から牧師となって Haworth にやって来た後も彼の中にあった詩は常にあたりの自然を捕えて表現を続けて来た。小さいブロンテ姉妹があたりの自然に対する感動を述べる手段は詩と絵であった。エミリーの兄ブランウエルも少年時代には美しい詩をもってあたりの自然を讃え偉れた腕前を見せていたという[19]。

又父の出版する書物が彼等幼い者達えの刺激となり，自分達の手であの細い書物を造って行ったということは驚嘆に価するものであると思うと同

時に，父の影響の偉大さを新たに感じるのである。

又父がLeedsから買い求めて来たという玩具の人形が子供達の想像力をかき立て，そこに一つの創造の世界をつくり出し，そしてエミリーの詩の殆どが書き上げられていることを思う時，こゝにも父が大きく一役買っていることを思うのである。「嵐ケ丘」の中には父アーンショー氏がリバプールから少年ヒースクリフを連れて来たことを述べてある。何日かかゝっての馬での旅だったようである。父パトリックも馬でリード迄出かけたのであるが，今ならロンドンより汽車で3時間余り鉄道での中心地になっているところであるが，当時ハワースからリード迄の旅行は中々大変なものであったであろう。

Mr. Brontë appeared to Ellen venerable and courteous. At this time he already wore a high white cravat, which he covered himself by winding white silk over it;[20]

（エレンにはブロンテ氏は敬虔な礼儀正しい人に見えた。もう既にこの時は彼はスカーフを首に巻いて白い絹を巻いていた。）とエレン・ナッシーは書いている。

更に遺品の中で私の眼を惹いたのは叔母の用いていた tea-pot であった。それには

To Me
To live is Christ
To die is Gain.[21]

とあい色の地に白い字が浮んでいた。ポウロの言葉である。

わたしにとっては生きることはキリストであり，
死ぬることは益である—聖書ピリヒ書一章—

実際にその品を見た折にはこれだと私は手を叩きたくなった。叔母の愛用した tea-pot であるにせよ，二十年間も朝夕の生活を共にしたエミリー達には日々無言の教えとなった言葉ではなかったろうか，To live is Christ, なる叔母の信じた言葉はエミリーにあっては To live is in Heathcliff と

いう強い信念となって，あの有名な

"My love for Linton is like the foliage in the woods: time will change it. I'm well aware, as winter changes the trees. My love for Heathcliff resembles eternal rocks beneath: source of little visible delight but necessary. Nelly, I am Heathcliff! He's always always in my mind;"

(Wuthering Heights Chapt. IX)

（リントンに対する私の愛は森の木の葉のようなものなの，冬になれば木が変ってしまうように時が来れば変ってしまうことは私はよく承知しているの。ヒースクリフル対する私の愛は，私の下の永遠の岩にも似ているわ，眼に見える喜びのもとではないけど必要なものなの。ネリー，私はヒースクリフよ。彼はいつでも私の心の中にいるの。）

なる言葉となってほとばしり出たのではないかと私は考えたのである。私にはそれが活けるつぼのように感じられた。

子供から少女に少女から大人にエミリーはこの地で常に墓石を見つめ乍らそして眠る人々に思いを馳せつゝ成長した。当時の墓石は教会墓地にぎっしりと敷きつめられ，雑草の生い繁る隙間もないようにしてあったとのことで[22]ある。死体をそのまゝ埋葬する為水にも汚物が交って衛生的に悪く又草木のないことは更に衛生上よくないことだったようである。この非衛生な地に姉妹次々に体をこわして死んで行ったのは何とも悲惨なことであるが，更にこの地の陰欝な気候は健康を害したのであろう。だがこの墓石の下に眠る人に思いを馳せた時この勝れた姉妹たちにはさまざまの想像の世界を呼びおこし多くの詩を書かせ素晴しい小説を書かせたのであるからこの墓石の役も大したものである。

宿の窓から私は幾度となく飽かず墓石を眺めたことだった。宿の窓の真向いに牧師館が見える。自分の窓の灯を点滅させて「お父さんの夜の巡視が始りますよ」とエミリーは兄ブランフウエルのいる酒場に警告したということであある。兄は妹の灯を見て父に見付からぬようにそっとうまく自分の部屋に帰へりついていたのであろうか。後にこの墓石を大分動かし隙間をつくりその間に沢山の木を植え衛生的にしたそ[23]うである。

この姉妹に多くの影響を与えた父はどのような説教をした人であろうかと私は思っていた処だったが丁度 Brian Wilks の *The Brontës* の中に彼の説教，手紙の一部がのっていたのでこゝに挙げてみたい。

『嵐ケ丘』の中にも始めのあたりでロックウッドが教会の説教に於いて罪の問題についてきく処が出ている。父パトリックも罪の問題について話したことが記されている。先述の通りある夏の夕方三人姉妹一人の男の子は皆揃ってまちの方へ散歩に下りて行った時，忽ち一天俄にかき曇りひどい雷雨となり光る稲光，轟く雷に父パトリックは一人家の中で肝をつぶし兄姉妹の無事を祈っていたそうである。幸い後で知ったことだったが子供達は知人の家に避難して無事だったらしいが，父はこれを題材にして罪ある人間への神の怒りとして次の日曜日の説教にしたとのことである[24]。

又父がある夫人にあてた心温る手紙を紹介したい。その人の娘の死を知らせる手紙である。

Eliza,

This is a sorrowful world, and I write to you on a sorrowful subject. You have already been inform'd that little Jane was in the scarlet fever; after some time it was hoped she was recovering and that the danger was past. However, she rather suddenly got worse, and yesterday, and this morning, things took an unfavourable turn, and, she got worse and wrose till at last she seem'd to sleep away, till she closed her eyes, on time, and opened them in eternity, I doubt not in an eternity of glory and bliss. Thus she had made an exchange infinitely for the better. This will, as it ought to do, give you trouble for a time, but on reflection, after a while, under all the circumstances of the case, you will perceive that for her, for you and many others, it is a merciful dispensation, and that the best use you can make of it is for yourself to live the remainder of your days a holy life, to be wise and good, avoiding temptation to evil, so that you may be prepared for death, come, where, how, and when it will.

Everything has been done for little Jane that could be done.[25]

エリザさん

この世は悲しい世の中です。あなたに悲しいお知らせをします。ジェーン

さんがしよう紅熱にかゝていたのはもう知っているでしよう。暫くの間は回復に向うようで危険も過ぎたと思われていました。処がむしろ突然急に悪くなり，昨日，いえ今朝急に悪化してどんどん悪くなり，とうとう昏睡状態に入りました。眼を閉じ時が経った時には永遠の眠にとその眼は開かれたのです。そうです，永眠と祝福の眠りだと私は信じて疑いません。だからお嬢さんは永遠の快方に向ったのです。このことは勿論あなたには暫くの間お悲しいことでしよう。でも考えてみれば暫くすれば，あらゆる条件を考えてみて，お子さんの為にはそれがよかったとお分りになるでしよう。あなたにも，彼女の為にも他の方にとっても天の配慮であったことが分るでしよう。あなたがその中から最善を尽すことは，あなたの残る生涯中浄い生涯を送り，賢明で善良，悪を避けて，あなたが何時，何処で，どのように死を迎えようと，その死に対し準備が出来ているように生活することです。

お嬢さんの為にはあらゆる手が尽されました。

勇気をもってあなたも死に直面した時，あわてないようにと忠告出来るのは誠に立派な人物であると考える。死を恐れなかったエミリーもこのような父から影響を受けていたのではなかったであろうか。

なほ更に父のもう一通の手紙をあげてみたい。但しこれはシャーロットの死に際しての悲しみの手紙であるから，エミリーは既になくアンもブランウエルもこの世を去っている。

エミリーにこの手紙が何かの影響があったとは勿論言うことは出来ないが，妻を亡くし次々に子供を失っても，その悲しみに毅然として耐えなを信仰を失うまいとする態度が我々の心を切々と打つものである。又前の手紙は人の娘の死に対しての慰さめ勇気付けであるが，今度は自分の愛する娘，而もたった一人残ったシャーロット迄失ってしまったのである。

彼はその悲しみにどのように耐えたであろう。

Haworth, near Keighley

April, 5, 1855

My dear Madam,

I thank you for your kind sympathy. My daughter is indeed dead and the solemn truth presses upon her worthy and affectionate husband and me, with great, it may be with unusual weight. But others also have or shall have their sorrows, and we feel our own the most. The marriage that took place, seemed to hold forth long and bright prospects of happiness, but in the inscrutable providence of God, all our hopes have ended in disappointment and our joy in the mourning. May we resign to the Will of the Most High....But our loss we trust is her gain.

But why should I trouble you longer with our sorrows? The heart knoweth its own bitterness—and we ought to bear with fortitude our own grievances and not to bring others into our sufferings.....[26)]

「キースリーの近く，ハウースにて
1855年4月5日

奥さま

御親切な御同情ありがとうございました。私の娘はまちがうことなく亡くなりました。この厳粛な事実は彼女をこの世で愛しいつくしんだ夫，又私に対して異常な重さとなってのしかって来ます。でも他の方々にもそれぞれの悲しみはあります。だが私共には一番こたえます。結婚してからこれからは長い幸福な見通しがあるように思われたのですが，測り知られぬ神の御意志に依り我々の希望も失望に終ってしまいました。そして我々の歓びは悲しみに終りました。私共は高きにいます神のみこゝろに総べをゆだねましよう。……我々には痛手ですが彼女には益となることだと信じます。

私共の悲しみで皆さんをこれ以上困らせてよいでしようか。悲しみは自分の心が一番よく知っています。私共は耐忍をもって我々のなげきに耐えなければなりませんし，他の方々を悲しみに巻きこむことは出来ません。

何と気なげな手紙であろう。自分の娘の死に対してさえこれだけの勇気ある信念を吐露出来た父 Patrick の信仰を讃えるものである。

この片田舎の Haworth の地をかくも有名にしたのは，勿論『嵐ケ丘』

なる小説の故でもあり，牧師館に育った珍しくも三人揃っての女流作家姉妹の誕生の故でもある。想像の中に産み出された嵐ケ丘なる地は荒野の丘の上にポツンと木一本あり，癈家の壁が残るだけにせよ，その地を永遠に保存しようとして何一つ別の建物を建てるでもなく，残してある大地のあることは何と有難いことであろう。英文学を学ぶ者にとってこれ程嬉しいことはない。又多くの文学愛好者達によって Brontës Society なるものが設立され，牧師館は museum として大切に保管され，小さな Haworth のまちは驚く程急な石の坂道の上に100年前のまゝの姿を保っている。多くの方々に感謝の他はない。シャーロット，エミリー，（アンだけは彼女の願いによって死の直前連れて行って貰った大好きな海辺の美しいまち，スカーボロの海を見渡す山の上に眠っている）兄ブランウエル，教会に眠る人達，又多くの byplayers 達，父 Patrick Brontë, 叔母 Elizabeth Branwell. の人たちの眠りにどうして平和がない等と云えようか？『嵐ケ丘』最後のこ言葉を借りて私もこれを結びたい。

> —how any one could ever imagine unquiet slumbers for the sleepers in that quiet earth.—
>
> (Wuthering Heights chapt. XXXIV)

そして荒野に立つエミリーの姿をもう一度思い浮べたいのである。

Emily at this time had acquired a lithesome graceful figure. Like Charlotte, she lacked a good complexion; her hair, a darker brown than Charlotte's was in the same unbecoming tight curl and frizz as her sister's, but her eyes were beautiful—'kind, kindling. liquid 'eyes, which sometimes appeared dark bule, sometimes dark grey.[27]

（エミリーはこの時には，シャーロットのようにしなやかな優美な姿になっていた。顔色はよくなかったが，髪の毛は姉さんと同じように似合いもしないピチッとした巻毛にしていた。でも彼女の眼は美しかった。親切な眼つき燃えたつような輝きの眼，水のように澄んだ眼，その眼は時にはダーク・ブルーに時にはダーク・グレーに思われた。

literature cannot be the business of a woman's life and ought not to be;[28]

と Robert Southy は姉シャーロットの手紙に答えている。「文学は女性の仕事にはなりません。又してもいけません」と。だが彼等は嵐ヶ丘に不滅の金字塔を建てた女性作家たちである。

(1) *The Brontë and this their world* Phyyllis Bentley p.58
(Thames and Hudson London)
(2) 〃 p.19
(3) 〃 p.63
(4) 〃 p.63
(5) *The Brontë* Brian Wilks p.28
(Viking)
(6) *The Brontes and their world* p.24
(7) 〃
(8) 〃
(9) *The Brontes and their world* p.45
(10) 〃 p.45
(11) *The Life of Charlotte Brontë* p.33
(Mrs. Gaskell)
(12) *The Brontë and their world* p.49
(13) 〃 p.55
(14) 〃 p.24
(15) *The Brontës*
(16) *The Brontë and their world* p.22
(17) 英米文学研究十号（梅光女学院大学）
(18) 〃
(19) *The Brontë* p.60
(20) *The Brontë and their world* p.45
(21) 〃 p.42
(22) } *The Brontë* p.34
(23)
(24) 〃 p.30
(25) 〃 p.139
(26) 〃 p.138
(27) *The Brontë and their world* p.46
(28) 〃 p.51